

 講話2「バガヴァッド・ギーター」概要・第7章 ～ 

 2つめは目に見える世界に対する誤解の放棄です。

ニューヨーク、ニューデリー、ブラジル、ポーランド、福岡……これらは地名です。私が今、太陽と言いますと、皆さんの心には太陽が思い浮かぶでしょう。心は思うものの形をとります。今度は象と言うと、心は象を思います。

私たちが眠っていて深い熟睡状態にあるときは、私たちのこの体や心、そして目覚めている時に見える宇宙の星や月などはどこに行っているのでしょうか？

朝になって目が覚めた途端に、それらはどこかからやってくるのでしょうか？

私たちが熟睡状態にある時には、私たちの心や体、あらゆる名前や形を持つものは消えてしまいます。そして目覚めた時に、またそれらが戻ってきます。それらはどこに行き、どこから帰ってくるのでしょうか？あなたの本質である意識は、どこに行くこともありません。意識というのは、空間よりも微細なもので、空間は決して動くことはありません。

「バガヴァッド・ギーター」の第7章から12章を学ぶことによって、目に見える世界に対する誤った思い込みを放棄することができます。

 3つめは神に対する誤った理解を放棄することです。13章から18章に書かれています。

多くの宗教があり、多くの神様があります。異なる宗教の対立で多くの戦争が起こっています。インドでも、シヴァ神と、ビシュヌ神を敬う人たちの間で争いがあります。様々な神様が、武器を持った姿で描かれています。神様も戦っています。恐ろしい形相をした神様、あるいは片手に蓮の花を持ってとても平和な顔をした神様、目を閉じて瞑想したお釈迦様の姿形など、様々あります。

神とは何でしょうか？神様が戦争を始めたら、一体どうなるのでしょうか？「プラーナ」という聖典には、神様の闘いについてが、書かれています。



とても興味深い昔話があります。

あるところに王様がいましたが、その王様は神様を信じていませんでした。大臣の一人が、王様に聖「プラーナ」をいつも読んで聞かせていました。そして王様に色々なお寺に行って神様を礼拝したり、貧しい人たちのために病院を建てたりすれば、世継ぎの王子が生まれると言いました。それを信じた王様には息子が生まれましたが、やがてその子は病気になりました。多くの医者が治療にやってきましたが、治すことができませんでした。王様は怒り、大臣を呼びつけました。

「大臣、おまえの言うことに何年間も従って来たのにこんなことになった。医者が来ても私の息子を治すこともできない。おまえの言っている神とは何なのだ？」そう言って、大臣の首根っこを捕まえました。大臣は震えました。

王様は大臣に次のように言いました。「12時間与えるから、3つの質問を考えておきなさい。12時間後

にここで会議を行うからその時に答えなさい。1つ目の質問は、神はどのように存在しているか。2つ目はどの方向に神がいるのか。3つ目は今、神は何をしているのか。この質問に答えなければ、お前の首を切る。」

大臣は泣きながら、家に帰りました。大臣には8歳の孫娘がいましたが、その日は、孫娘が駆け寄ってきても、大臣は涙を浮かべて彼女を脇へ追いやりました。孫娘は、何度も大臣のところへ来て、聞きました。

孫「何が起こったの？ どうして泣いているの？」

大臣「今日は私の最後の日だ。明日、私の首が切られるのだ。王様の3つの質問に答えられないと首を刎ねられるのだ。」

孫「おじいちゃんは、毎日聖典を読んでいるでしょう。王様の質問はたったの3つだけです。私だって毎日、学校で先生から沢山の質問を受けていますよ。どうして答えられないの、おじいちゃん？どんな質問か教えてちょうだい」

大臣「①神はどのように存在するか。②どちらの方角に神様を見ることができるか。③今この瞬間、神は何をしているか、だよ。」

孫「私は答えを知っているわ。明日、私と一緒にお城に連れて行ってくれれば、私が王様に答えます。」

翌日、王様は、大臣は逃げてしまって会議には来ないだろうと思っていました。しかし、その孫娘が大臣の代わりに答えに来ていると聞き、「たった8歳の娘がどうやってこの質問に答えられるのだ？」と思いました。孫娘が会議場に連れて来られて、「この王様の会議場に入れるとは、大変光栄です。そして立派な大臣の方々や王様の前で3つの質問に答えられることを、とても嬉しく思っています」と言いました。王様はその孫娘の話の仕方、礼儀正しさを見て、とても嬉しく思いました。

王「答える準備はできましたか」

孫「昨日、王様は私の祖父に3つの質問をしました。質問に答えられなければ首を切ってしまうとおっしゃいました。それは今、私の置かれている状況です。もし、私がちゃんと答えられなければ、王様は私の首を切るのですね。まず、王様がなさったその質問を、この会議場の皆さんの前で言ってください。それに対して、私が答え、その答えが正しいかどうかをここにいる皆さんに判断してもらいましょう」

王様「1つ目の質問は、どのように神は存在しているのか、だ。」

孫「まず、私はこの王宮の中を動いてもいいですか？」

王「どうぞ」

孫娘は王の玉座のそばまで来ました。玉座のそばのテーブルに置かれたミルクの入った器を取り上げ、王様に訊ねました。

孫「この中に何が入っていますか？」

王「ミルクです」

孫「そうです。ミルクからはヨーグルトができ、またバターミルクができ、バターミルクをよくかき混ぜると、バターができます。そしてバターを火にかけると、それが純化されてギーになります。つまりこのミルクからヨーグルト、バターミルク、バター、ギーができます。それらは、ミルクから分かれて存在できません。それと同様に、ありとあらゆる名前と形を持つものは神から生まれて存在しています。神が存在しない場所などあるのでしょうか。神と呼ばれるものは、あらゆるものの中に存在しているということです。」何と明晰な答えだと王様はびっくりしました

孫「では、2つ目の質問をしてください。」

王「どちらの方角に神は見えるのか？」

孫娘は、玉座の側の近くにあるランプの側に歩いて行きました。

孫「このランプはすべての方角を照らしています。炎の元になる部分までも照らしています。それと同じように、神というものは、すべての良いものも悪いものも照らしています。あらゆる方角を照らしていますから、あらゆる処に見ることができるのです」王様は、明晰明確な答えを聞いて幸せになりました。

孫「3つめの質問が残っています。今、この瞬間、神は何をしているのか？ ですね」

王「ここに来て座りなさい。君はそれに値する。さあ、ここに座りなさい。」

孫「では、そこに座りましょう」

王様は、彼女が座れるように自分は玉座から去って、彼女の手には王様が持つ指揮棒を渡しました。孫娘はその棒を持って「その大臣、私のおじいちゃんを呼んで来て、この中へ入れなさい」と言いました。王様は彼女の隣に立っていました。

孫娘の祖父である大臣が会議場の中に入って来ました。孫が玉座に座っているのを見て「いったい何をしているのだ？ 王様の玉座に座って！」と大臣は叫びました。

孫「私がやっているのではありません。神様がしているのです。神がなさることは、私たちの想像を越えています。あらゆることは神様の力で起きています。ですから私たちは神様がなさることに従うのが義務です。私たちは常に前向きな心の持ち方をして、神が存在していることを感じ取らなければなりません。」これが3つめの質問の答えでした。



体や五感と呼ばれるもの、心と呼ばれるもの、そういったものも、すべて神の現れです。

15章14節に、食べ物は口の中に入って自分の体によって消化される、とあります。私たちは食べ物を口に入れて消化します。

人間は5つの感覚器官と心を持っています。それを持っていなかったら、見ることも聞くことも、話すことも考えることもできません。私たちが何をしようともそれは神の力によって行なわれているのです。神はありとあらゆるものの中に存在し、私たちの五感や心を通して現れています。

どのように座ったらいいか、どのように呼吸したらいいか、どのように集中したらいいか、何を食べたらいいか、どのような食べ方をしたらいいか、どのように寝たらいいか、などをギターは教えています。まるで母親のような存在です。



この聖典をきちんと理解することができれば、神の愛があなたのところへやって来ます。生きとし生けるもの、あらゆる存在を尊重することができるようになります。



イタリアでリトリートをしたときに、ある男性が、「1000の質問があります」と私のところへやって来ました。しかしその男性は、美しい海の波を眺めているうちに、質問が全部消えてしまいました。

波というのは海から離れて存在することはできません。波、海、それは何なのでしょう？

私たちの思考というのは、海の波のようなものです。

すべての質問は海の波のようなものです。その質問に対して、必ず答えというものがあります。



質問:「バガヴァッド・ギーター」は戦場でのカルマヨーガについて、クリシュナとアルジュナの問答で進んでいきますが、私たちの場合は、日常生活が＝家庭や家族関係、仕事の場と、仕事の人間関係、つまり、それが戦場だと思えます。そこでの心の扱い方、自分はどう行動すると良いかを教えてください。

スワミジ:心とは何でしょう？ 私たちは心と言うものがあると思っています。例えばジャパや瞑想をしているときに、心があちこちに飛ぶのを感じます。自分の心が邪魔をして集中することができません。ほかの人を理解することもできません。ほかの人と誤解が生じるのではないかと、いつも恐れを感じています。人間関係が崩れるという恐れがあります。これが私たちの心です。

この心とは、単に沢山の印象の集まりです。グルデブ・シヴァナンダジは、心についてある定義をおっしゃいました。**意識＋思考＝心**です。心から思考を引くと意識になります。

私たち自分の心を考えてみてください。心には3つの段階があります。

目覚めた状態のとき。それから夢をみている状態、夢のない熟睡の状態があります。

1. 目が覚めた状態の心のことをサトヴィック・マインドと言います。
2. 夢を見ている状態はラジャシク・マインド。
3. 深い熟睡状態はタマシク・マインド。

タマス、ラジャス、サットワと呼ばれる3つのグナ(性質)が、私たちの心を作っています。ギーターの第1章には、3人の重要な人物が登場します。



ドリターラシトラ 目が見えません。彼はタマスな性質の象徴です。虎にとって、自分の子供はかわいいのに、他の子虎は皆、食べ物に見えます。ドリターラシトラとはそのようなタイプの人です。



ドゥルヨーダナ 第1章の2節と3節には、ドゥルヨーダナに語らせた言葉があります。ドリターラシトラの息子です。ラジャスを象徴しています。ラジャスとは、いつも人と比べて競って、闘ったりしている状態のことです。心が絶え間なく動いているのです。



アルジュナ 第1章21節から24節まではアルジュナの言葉が語られています。彼はサトヴィックな性質と他の性質とを合わせ持っています。

私たちの心はいつも過去と未来を行ったり来たり揺れています。時計の振り子のように。その振り子を自分の手で掴んだら、時間はどうなるでしょう？ 止まりますね。

私たちの心はいつも3つのグナの性質に支配されています。

ギーターの第2章はとてとても大切です。第2章をきちんと理解することができれば、それ以外の章を読む必要がないほどです。

アルジュナは第18章(最終章)で、自分の間違っただ思い込みがすべて消えたと言います。そしてきちんとした記憶を得たと。では、記憶とは何でしょう。自分はあらゆるところに存在している意識であると理解することです。まず第2章から勉強していきましょう。

